

# メルロ＝ポンティ・サークル 第14回大会 プログラム

大会：9月17日（月・祝）

会場：玉川大学大学研究室棟B107会議室／控室B101会議室

- 10:00～10:45 「具体的経験と抽象的意味」 齋藤 瞳（日本大学）  
10:45～11:30 「メルロ＝ポンティにおける共通感覚 — 再認モデルとは別の仕方 — 」  
國領佳樹（首都大学東京）
- 休 憩
- 11:40～12:25 「メルロ＝ポンティにおける音響的世界の意味」山下 通（九州大学）

昼 食【会場近辺には食事のできる場所がありません。つきましては、お弁当を参加葉書にてご注文いただくか、予めご用意をお願いいたします。】

- 13:30～14:15 「生産と受容の立場を超えて — メルロ＝ポンティの芸術論がもつ可能性  
について — 」 柿沼美穂（東京芸術大学）
- 14:15～14:40 Business Meeting

## シンポジウム 「メルロ＝ポンティと美的体験」

- 14:45～15:15 本郷 均 「作品／問題の場」  
15:15～15:45 椎名亮輔 「メルロ＝ポンティと音楽美学」  
15:45～16:15 貫 成人 「ダンスをみる「眼」」  
特定質問者：加賀野井秀一

休 憩

- 16:20～17:30 discussion
- 18:00～懇親会 朔風館（玉川大学内）会費 4000円

## シンポジウム 提題概要

### 作品／問題の場

本郷 均

「存在は、それを経験するためにわれわれに創造を要求するものである」(VI251)。この創造の要求は、われわれをして芸術に向かわしめるものとして見れば、存在の与えられ方を示すものと考えることが出来る。セザンヌは、「存在そのものの根」(OE エピグラフ)にあって、そこにあることで彼は絵を描いた。彼にとって絵を描くことは「翻訳=表現 traduire」だったが、翻訳する際、適切な訳語=表現に至りつけないうちしばしば原語を書きおくと同じく、彼は何も塗らないままにしておいた。その空白から湧出する意味は、鑑賞者を鑑賞者のままに留めおきはしない。ここには絡み合いがあり、その絡み合いが制作者と鑑賞者とを共々巻き込むところに、作品の場が開かれている。本提題は、このような場について、絵画を中心としてメルロ＝ポンティの思考をまとめつつ考察することで、本シンポジウムの露払いの役どころを果たすこととしたい。

### メルロ＝ポンティと音楽美学

椎名亮輔

メルロ＝ポンティの美学への貢献として語られることが多いのは、彼の晩年の著作『眼と精神』に見られるセザンヌを中心とした絵画論であり、彼が音楽美学について特に語ったことはなかったようである。しかし、ここにゲシュタルト心理学、ベルグソン、フッサールという補助線を入れることで、音楽美学（ひいてはその背後にあるロマン主義）とメルロ＝ポンティ美学の間に何らかの関連が見出されるのではないだろうか。音楽の純粋性・絶対性・自律性を称揚するロマン主義の音楽美学への影響はよく知られているが、その芸術の自律性が絵画の分野で実現されたのが印象主義からセザンヌに至る作家たちの作品であり、さらにその流れが音楽の 19 世紀的文法を打ち破る中で生まれたのが、ベルグソンやゲシュタルト心理学的な音楽の把握であるとする、その直近の後継者がフッサールであり、そこからメルロ＝ポンティに至るまでの道のりは案外遠くないのではなかろうか。

### 「ダンスをみる「眼」」

貫 成人

最近のドイツにおけるダンス研究文献に、ときどき「触覚的視覚 (taktilen Sehen)」という語を見かける。ダンスの観客が、ダンサーの身体やその運動、姿勢などを、単に、視覚情報として「見る」だけではなく、同時に、自分自身の身体的感覚等にたいするダンサーからの触覚的働きかけを感知している状態を指すものである。舞踊史研究家がいわば直観的に用いているこの概念は、メルロ＝ポンティの分析装置、たとえば運動の知覚における「図と地」の交代、「ものの内での超越」「運動意味」などを用いることによって解明することができる。また、1980 年代後半からダンス・シーンに登場した「コンテンポラリーダンス」においては、このメカニズムが意識的に用いられている。本提題では、ダンサーの具体的動きと観客の感覚とのあいだに見られるメルロ＝ポンティ的メカニズムを取りだし、「ダンスを見る」経験の構造を解明したい。